

特集 ⑤

あるものを活かして ないもののへ育てる！

眞田井 良子 建築・まち育て研究所 主宰 眞田井 良子（八幡浜市）



YGPでのかまぼこ板を利用したアート制作「かまぼこカーテン」

■「まち育て」活動をはじめたきっかけ

八幡浜で生まれ、八幡浜で高校生まで育ちましたが、建築デザインを学び（大学進学）、修行（就職）する場所として東京・仙台・高崎などのご縁があり、各地において、仲間と一緒に駅前の再開発の提案や団地再生などの提案を行ってきました。また、大学時代に直島や越後・妻有における現代芸術と過疎地域の融合を目の当たりにし、過疎地域でも、あるもの（廃墟・廃校・古民家等）を活かして、芸術を加えることで新たな付加価値とコミュニティ再生などの効果が得られそうだと実感しました。そんな中再び地元に戻ってくることで、今まで他地域で行ってきたことを地元で是非やっていきたいと思ったのです。

■地元での仲間との出会い

八幡浜に帰ってきて、中学校時代の恩師である井上靖先生に「芸術でまちを元気にすることをやってみたいのですが、八幡浜で一緒にやって下さいいような方はいらっしゃいますか？」と相談すると、若い方が中心で頑張っている、まちおこしボランティア

アグループYGP（八幡浜元氣プロジェクト）を紹介して下さいました。また、八幡浜に帰ってきて就職した先の設計事務所の所長さんが、愛媛経済レポートをみて、YGPが八幡浜笑人制作委員会を立ち上げるにおいて制作委員を募集している記事を見つけ、「面白そうだから参加してみたら？」との声掛けにご縁を感じすぐに参加し始めました。

■八幡浜笑人の取材を通じて得たもの

八幡浜笑人制作委員会というのは、ワークショップ形式で、八幡浜の頑張っている方、輝いている方、笑顔の素敵な方、敵な方の他、様々な資源を掘り起こし、取材して記事にし、最終的には本として出版し、広くいる



八幡浜笑人の取材 岡崎直司氏





田村菓子舗様の「青石」による洗い出しの床

津を歩き、まちにある資源を観察しました。その中で、非常に目にする「青石（緑泥片岩）」に目をつけ、地域の方々と50人にご参加いただき、青石の小石にメッセージを書き込んだものを、うに（あるいはつわぶき）状に床に敷き詰めていただいた洗い出し仕上げを試みました。二名津地域の皆様の想いが詰め込まれた場となり、まさに「住民参加」と「地域資源の活用」

YGPのまちおこし活動のなかで大切にしていることは、できるだけ多くの方に参加していただける仕組みをつくることと、

■住民参加と地域資源の活用・・・ そして「まち育て」へ

いろいろな方に八幡浜の元気人のことを知っていただくという一連のことは行う委員会でした。聞いてみると、YGPは、「人の元気をまちの元気につなげる」ということをスローガンに、この事業を行なうとのこと。実際に取材に参加してみると、笑人の皆様は住んでいるまちへの造詣が深く、色々な取り組みをされているので、地元にある資源をよく知ることができ、その資源を使つてどのようなことができそうかという夢のお話まで一緒に考えさせて頂く機会となりました。この活動を通じて、八幡浜の資源の中に「人」という資源が強く濃く浮き出るようになりました。

■仕事における「まち育て」の広がり

地域資源に目を向け、それをどう活かしていくかということでした。YGPでの活動が広がりを持つてきた頃、ついに設計事務所を独立して行うという決断をし、どういう事務所を目指すか整理していくと、YGPでの活動や考え方をそのまま体現している姿が自然であることに気づきました。自分が提案したプロジェクトには、よく「あるものを活かして、ないものへ育てる」と書かせていただいております、それが転じて「まちづくり」ではなく「まち育て」となり現在に至っているのです。

による「まち育て」へと繋がったのです。現在、その店舗の前の空き地に、地域の皆様のお力で広場がつけられております。

■今後の「まち育て」活動

仕事、ボランティアに関わらず、地域にある資源の掘り起こしを引き続き行い、それぞれの「強み」を引き出して、それらを掛け合わせてできることを提案し、一つ一つ実行していきたいと思っております。どれだけ多くの「住民参加」があり、「地域資源」を有効活用できるか、また、地域への愛着と誇りを育むことができるか、乞うご期待です!!



田村菓子舗様のワークショップに参加された皆様